

チャレンジ講座（理系第2回）を実施しました

6月20日（水）に今年度4回目となるチャレンジ講座が実施されました。

本学医学部看護学科の三重野英子先生を講師に迎え、「認知症高齢者への看護の理論化」というテーマで行われました。

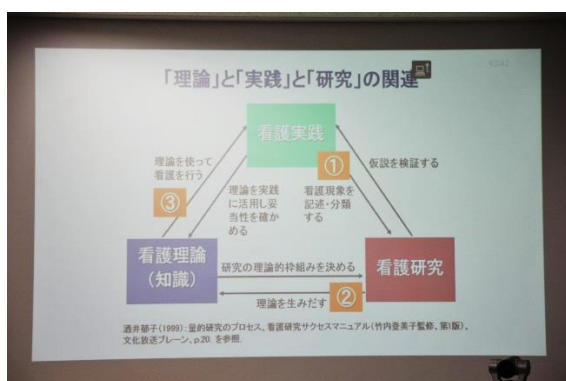
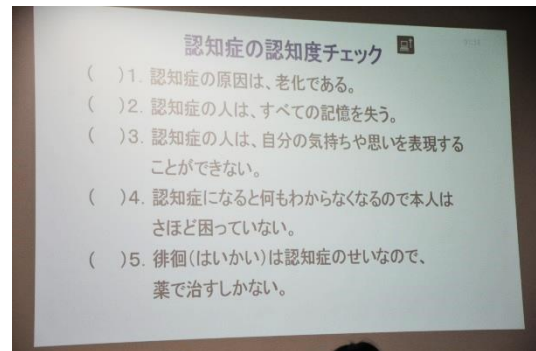
遠隔配信された高田、国東、臼杵、大分西、竹田、中津南、大分鶴崎、大分雄城台、安心院及び来学の大分東明、楊志館の計11校314名が受講しました。

まず、三重野先生は認知症の認知度についてチェックを行い、



認知症を「いったん獲得した知的機能が、脳の病気によって、持続的に低下し、日常生活・社会生活に支障を来している状態」と定義しました。その症状として「中核症状」と「認知症の行動・心理状況（BPSD）」の2点について事例を用いて示しました。

次に看護学生が行った研究「認知症高齢者その人の世界を理解し歩み寄る看護」について説明してくださいました。学生は実習の経験から「認知症の進行に伴い、認知症高齢者は、現実の状況を理解できず不安や混乱を生じやすいのではないか。」という仮説を立て、その世界を理解することで適切な看護ケアができるのではないかと思い研究テーマに選びました。「患者さんの言動・表情」「学生の思い」「学生の言動・表情」をプロセスレコードにまとめ、そこから「認知症の世界と看護者としての客観的な世界の両方の視点を持つことで適切な看護ケアができる」と結論付けました。



看護実践と看護理論と看護研究の三位一体になることで認知症高齢者に関する適切な看護が生み出されることを示しました。

授業後に生徒から出された「認知症は治るのですか」「認知症と痴呆症の違い」「認知症を防ぐには」といった質問に三重野先生は丁寧に答えてくださいました。

講義後のアンケート調査では、「総合的に判断して授業がよかった」（100％「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の合計。以下同じ）、「教員は真剣に取り組んでいた」（100％）、「受講生は授業に意欲的に取り組んでいた」（99％）という結果でした。遠隔配信については、「音声はよく聞こえた」（98％）、「映像はよく見えた」（91％）という結果が出ました。受講生の主な感想として、「自分の言動と対象者の反応を客観的に見ることが実践を理論化（研究）するためには必要だとわかった」「認知症の方への関わり方は友達との人間関係においても通じるものだった」といったものが寄せられました。